

論文の内容の要旨

論文題目：『菩薩地』「眞実義品」から「撰決択分中菩薩地」への思想展開

副題：vastu に関する学説を中心として

氏名：高橋晃一

1. 目的

本論文で取り上げる『菩薩地』および「撰決択分中菩薩地」は、瑜伽行派の基本典籍『瑜伽師地論』の一部を構成する文献である。『瑜伽師地論』の著者問題、成立過程の問題は複雑で、未だに解決されていない点も多いが、思想的発展段階の異なるいくつかの部分から構成されているとする点では現代の研究者の見解はほぼ一致している。そして、その中でも特に古い思想を伝えている部分の一つが『菩薩地』であり、その『菩薩地』の思想を継承・発展させたものが「撰決択分中菩薩地」と考えられている。

さて、瑜伽行派の思想は一般に唯識思想と称され、外界の対象の存在を認めない点に特徴がある。それに対して『菩薩地』では勝義的実在としての vastu を中心に学説が構成されており、そのため、一見すると唯識思想とは相容れない印象を与えている。従来の研究では、このような『菩薩地』の思想に関して唯識思想以前の学説とするだけで、その後の思想との関係については十分に考察されてこなかった。しかし、『菩薩地』の vastu に関する学説は「撰決択分中菩薩地」で五事説・三性説によって分析されており、そこには思想史的な発展の足跡を見出すことができる。こうした状況を踏まえて、本論文では『菩薩地』「眞実義品」から「撰決択分中菩薩地」への思想展開について、vastu に関する学説を中心に考察することを目的としている。

2. テキスト

本論文で取り上げる『菩薩地』のテキストとしては、Cambridge 写本と京大写本に基づく荻原雲来校訂本、および R.SAGkRtyAyana 写本に基づく Nalinaksha Dutt 校訂本があり、特に荻原本は多くの研究で底本とされているが、今回の研究では、先行研究で使用された三写本の他、これまで利用されていない Nepal National Archives 所蔵の写本を加えた四種の写本により、『菩薩地』「眞実義品」に関して、荻原本改訂版の作成を試みた。また、「撰決択分中菩薩地」に関しては、今回の研究と直接関係する箇所を抜粋し、北京版、デルゲ版、ナルタン版、チョーネ版を用いて校訂テキスト作成した。本論文では該当箇所についてはこられの校訂テキストを使用している。なおこれらはシノプシスおよび和訳とともに本論の後に掲載してある。

3. 本論の構成

本論文では『菩薩地』と「撰決択分中菩薩地」の関係について、具体的に次の三点に焦

点をあてて、考察している。

- ① 『菩薩地』「眞実義品」の vastu に関する学説と五事説・三性説の思想史的關係
- ② vastu が言語表現し得ないことに関する三つの論証に見られる『菩薩地』から「撰決択分」への思想的展開
- ③ 分別から vastu が生じるという学説に見られる『菩薩地』から「撰決択分」への思想的展開

①では『菩薩地』の vastu に関する学説を整理し、それが「撰決択分」の五事説でどのように継承され、解釈されていくのか、という点について考察する。また、「撰決択分」の三性説の定義に関しては、その学説の起源とされている『解深密経』との関係を中心に考察し、五事説が『解深密経』の三性説の前提となっている点を指摘する。②③は『菩薩地』「眞実義品」で説かれ、また「撰決択分」の五事説および三性説に関する論述の中でも繰り返し取り上げられ、再解釈されている話題であり、いずれも実在である vastu に関わる話題なので、『菩薩地』「眞実義品」から「撰決択分」への vastu に関する思想の展開を探るための手掛かりになると考えられる。

なお、①から③の論点は各文献の記述の中で複雑に関係しあっている場合があり、個々の論題ごとに論じていくと、返って各学説ごとの特徴が捉え難くなる。したがって、実際の論述は、本論を以下の三つに大きく分けて進めている。

- 2.1 『菩薩地』「眞実義品」の vastu に関する学説について
- 2.2 「撰決択分中菩薩地」の五事説について
- 2.3 「撰決択分中菩薩地」の三性説について

これら各節の中で、先にあげた①から③の各論題について論じ、そのうえで最終的な結論をまとめている。

4. 結論

上記の手順による考察の結果、本論文では以下の結論を導いている。

『菩薩地』「眞実義品」では、vastu は言語表現の基体でありながら、勝義として言語表現し得ないものとされているが、「撰決択分」の五事説では vastu の言語表現の基体としての側面を相(*nimitta)、言語表現の基体とならない側面を真如(*tathatA)と分析し、これらを名・分別・正智という概念と関連させて説明している。「撰決択分」の五事説はその術語の用法が『菩薩地』「眞実義品」と共通していることや、『菩薩地』「眞実義品」への言及が見られることから、その学説を継承発展させたものと考えられる。

一方、「撰決択分」で説かれる三性説はその内容から『解深密経』の三相説を継承したものであることは間違いない。しかし、『解深密経』では三相説の定義やその特徴を説明する際に五事説を構成する要素である相・名・分別・真如という術語を用いることがしばしば見られる。こうしたことから、『解深密経』の三相説は三相の概念だけで完結した学説ではなく、相・名・分別・真如という概念を前提に構成されていることが分かる。

したがって、一方で、『菩薩地』の *vastu* に関する学説から「撰決択分」の五事説への発展を想定することができ、また他方で、五事を構成する概念が三性説成立以前にすでに術語として用いられていたと考えられることから、少なくとも『菩薩地』の *vastu* に関する学説から『解深密経』での三相説成立に至るまでの間に五事説の形成過程があったと考えられる。

こうした全体的な思想展開の中で、本論では「言語表現し得ない本質を持っていることに関する三論証」と「分別から生じる *vastu*」という二つの話題に着目し、*vastu* に関する学説の変化を考察している。

まず、三論証については『菩薩地』で説かれていた三つの論証は「撰決択分」の五事説にそのまま継承されている。ただし、五事説の場合は議論の中心は言語表現の基体としての **vastu* に相当する相(**nimitta*)であり、勝義的実在としての真如ではない。一方、「撰決択分」の三性説では三論証に簡単に言及するだけで具体的な記述はないが、『顕揚論』は「撰決択分」のこの部分に基づいて三論証に訂正を加えている。

また、『菩薩地』「真実義品」で説かれていた「分別から生じる *vastu*」に関しては、「撰決択分」の五事説は分別から生じる相(**nimitta*)としてこの学説を継承している。一方、これと類似した学説として、「撰決択分」の三性説では「言語表現から生じる **vastu*」に言及しているが、その際の **vastu* は影像として説明されており、これは五事説で分別から生じる相を影像と明確に区別していることからすると、基本的な点に違いが見られる。

vastu に関連する二つの論題を『菩薩地』から「撰決択分」の五事説・三性説の記述の中で辿っていくと、『菩薩地』「真実義品」と「撰決択分」の五事説で説かれる内容は基本的に一致しているのに対して、「撰決択分」の三性説に関する記述では、思想的に新たな展開の素地を提供したり、あるいは基本的な点でそれ以前の学説と異なっているという傾向が見られる。このことから『菩薩地』以来の *vastu* に関する学説に変化が生じる過渡期の思想が、「撰決択分」の三性説に関する記述の中に現れていると考えられる。しかし、この傾向が唯識思想とどのように関連しているのかという点については、本論文で扱った資料では十分に論じきれないので、今後の課題としたい。

(終)